

附属中学校ダンス部

## The Interview

特別支援学校に行きました。感想としては素晴らしい教育を行っているなど。ただ連携といっても、つくられたフレームの中で動くのではなく、その前になにかを着て交流するような場があれば面白いんじゃないかなと思います。個々の素晴らしさをお互いの心が触れ合うような場で、多様性を自覚できるようにしていきたい。例えば、音楽会や、ここに飾ってある絵もそうですが、絵画展です。いくつもの学校が連携し、連合的な音楽会、絵画展を行っていただけら面白いと思います。それぞれが協力して音楽会、絵画展などをつくる中で、共通の感覚、まとまりを感じていく。先生も生徒もお互いを理解し、多様性を自覚できる。そういった企画ができればと思っています。

また大学との連携は高大連携として各附属学校と筑波大学の関係性を強めていくということが課題になってくると思っています。附属だけの連携ではなく、附属というものが大学との関係性をもとに存在している以上、そのような大学との関係性を強めていきたいと思っています。

### ●筑波大学附属学校のオリジナリティという点から、今後の展望についてお聞かせください。

附属学校のオリジナリティとは、優れた最先端の教育研究を行うということです。またそれは社会的ニーズから離れたものであってはならない。社会的なニーズ、現場のニーズに敏感に反応し、日本の教育に対して先導的な役割を担っていくが重要だと思います。また、任期中にやっていきたいことのひとつが、オリンピック教育の発信です。オリンピ

ックは人間の向上心を刺激する国際的なムーブメントです。オリンピックのスローガンは「より速く、より高く、より強く」。これらは全て比較級で自分を一歩でも高めていこうとするものです。最上級でないのは、相手との競争ではなく、自己との比較の中で、自分を高めていくものだからです。オリンピックは自己向上と、国際的な平和をつくりだそうとする合力です。オリンピック教育は、小中高大の全てで行うことができます。附属特別支援学校にもパラリンピックで活躍している選手がいますよね。オリンピック選手をこれだけ多く輩出している学校は少ないと思うんです。今、大学ではオリンピック教育の一環として、日本オリンピック委員会と結びついて講義を行ってもらったりしています。オリンピック教育を通して、附属学校でも国際平和教育を展開していきたいと思っています。まだ実行できていませんが、オリンピック教育を筑波から発信していきたいと考えています。

### ●最後に附属学校の児童生徒、教員へメッセージをお願いします。

僕は、年をとっても自分に自信を持っていないという意識が強いです。僕は恥ずかしい話、常々劣等生という意識が強かったから、自分を常に低いところに置いておく習性があった。だから、少しでも自分をよくしていきたい、高めていきたいという意識があるんです。何かを求めていく、自分をよりよくしていくという向上心を、常に忘れないということは大切なことだと思うんです。向上心なくして、人間は向上しない。それが教師の方々や生徒のみなさんへのメッセージです。

## The Interview

## 平成20年度筑波大学附属学校研究発表会報告

附属学校教育局 準研究員 石川満佐育

平成21年2月21日(土)に「これからの学校教育～附属学校からの提案」と題して、附属学校研究発表会が開催された。

研究発表①「ライフスキルを高める心理学の授業」では、熊谷恵子氏より授業の概要が説明され、石川満佐育氏より授業効果の検討結果が報告された。学校教育における新しい取り組みとして注目される研究である。

### 研究発表②「『科学の芽』賞の実践報告と科学教育の推進—小中高大の教職員が一体となって取り組んだ挑戦—」

では、附属駒場中・高等学校、濱本悟志氏より「科学の芽」賞の実践報告、今後の展望について紹介された。応募される研究の質の高さ、「科学の芽」

附属駒場中・高等学校 濱本悟志先生

賞を支える実行委員会の志の高さ、附属学校教育局の取り組みとして、今後の発展が大いに期待される。

シンポジウムでは、「これからの学校教育～附属学校からの提案」と題し、附属中学校、角田睦男氏より教科教育の必要性、石隈利紀氏より特別支援教育の重要性、坪田耕三氏より国際教育の発展性について提言され、活発なディスカッションがなされた。

研究発表会の最後には、本年3月で退職された前附属学校教育局教育長、谷川彰英氏より「附属学校へのメッセージ」と題し講演が行われた。教育長として歩まれてきたこれまでの6年間の取り組みの紹介、今後の附属学校への提言がなされた。



前附属学校教育局教育長 谷川彰英氏

## 平成20年度春期研修会報告

附属学校教育局 教授 篠原吉徳

観客が鑑賞したのは、附属小学校講堂の舞台上で練り上げられる、附属中学校ダンス部員による群舞である。清新さが充溢し、生の躍動を感じさせる、中学生の舞踊は、観客の脳裏に、「青春讃歌」を響かせたことであろう。これは、春期研修会(平成21年3月26日開催)での一光景である。観客に感動を与えた附属中学校ダンス部は、昭和58年に創設された、歴史と伝統のあるダンス部である。今後の一層の発展を予感させる舞であった。

平成21年3月26日、附属学校教育局主催の春期研修会が、139名の参加者を集め、附属小学校講堂で開かれた。研修会として、上記ダンス部の演技を挟むように、筑波大学体育科学系加藤澤男教授と情報工学系山海嘉之教授による講演会が実施された。

メキシコ大会を含め、ミュンヘン、モントリオールとオリンピック3大会に連続出場を果たし、8個の金メダルを獲得され、名アスリートの名を恣にされた加藤先生は、「私のオリンピック」と題し、ご講演くださった。オリンピックの起源がゼウス神の祭典であったことを話のマクラに、ご講演が始まった。燦然と輝く金字塔に隠れるようにしてある、幾多の試練や苦闘を、先生は述懐された。「できること」と「わかること」との乖離を直視し、合一を図ることにより、立ちほだかる苦難の超克がなされることを論ずように話された。

加藤澤男教授



山海先生は、運動機能障害を来した人々への、動作支援リハビリテーションに役立てることのできる、ロボットスーツ(HALと命名される)の開発者として、その名が知られる。大スクリーンに、HALを装着し、歩行動作が支援される方々を映し出しながら、HALが異分野の諸科学の融合である「サイバニクス」の所産であることを紹介された上で、「表皮」を流れる電位信号を検出・処理し、人による動作の随意的制御を支援するのがHALである、と説明された。

今回の、2つの講演のKey Wordsが、奇しくも、「運動・動作」、「身体」であり、さらに、附属中学校の生徒の演目が「舞踏」であったことは興味深いことである。



山海嘉之教授

## 平成20年度新任教員交流会報告

附属学校教育局 教授 江口勇治

20年度に附属学校に勤務された35名あまりの教員の研修を兼ねて、次の内容で2月17日半日をかけて附属学校教育局で新任教育交流会が開催された。

### ①講話「附属学校を取り巻く現状と課題」

谷川彰英前教育長及び篠原吉徳教育局教授

### ②グループ別交流会

(5グループに分かれ指導教員の司会で課題等を討議)

### ③全体意見交換会その後懇親会

この企画は「附属学校教員の研修の一貫」であるとともに、「附属学校の教員相互の理解を深めると共に附属学校教育局、各附属学校についての知見を深める」目的から開催されているもので、新任の先生方が筑波大学の附属全体を知る貴重な機会となっている。附属の今後の発展は、ひとえに教鞭を執られている先生方の力にかかっていることを考えると参加された先生方がさらに飛躍されることを研修担当の一人として祈念する次第である。



a meeting for giving papers